都賀大陸著『絵本三国志』序・賛の翻刻および註釈のこころみ

Annotated Transcription of EHON-SANGOKUSHI-Preface part

金沢大学大学院人間社会環境研究科　木　越　秀　子
KIGOSHI, Hideko

〔一〕はじめに

本稿でとりあげる『絵本三国志』は、金沢大学人間社会学域・歴史言語文化学系の上田望氏が、科学研究費・若手研究（B）「日本・中国における『三国志演義』の読書史研究」（２００２年度～２００３年度研究課題番号：１４７１０３１５）の研究を進めるなかで、江戸時代の『三国演義』受容の過程において、元禄期の『通俗三国志』と天保期の『絵本通俗三国志』の重要性に改めて注目し、収集した資料である。

本稿は、氏のご許可を得て、本資料を底本としてその序・賛の翻刻、及び解題をこころみたものである。また本稿は、北陸古典研究会誌『北陸古典研究』26号（２０１１年11月）掲載の本書巻一～五の本文の翻刻を補うもので、先の本文ではスペースの都合もあり本文の翻刻のみであったが、本稿では注もほどこした。

【1】解題

『三国演義』は中国の明代に書かれた、後漢末・三国時代を舞台とする時代小説・通俗歴史小説であり、四大奇書の一つに数えられる。この『三国演義』の日本での受容については、上田望氏の「日本における『三国演義』の受容（前篇）―翻訳と挿図を中心に」（２００６年３月、「金沢大学中国語学中国文学教室紀要」）に詳しく考察されている。それによると、『三国演義』は明で刊行されて間もなく日本に輸入された。そして、「湖南の文山」と名乗る隠士がこれを翻訳し、元禄４年（１６９１）９月に、西川嘉長なる人物の賛助を得て『通俗三国志』の名で開板、京都の書肆栗山伊右衛門から刊行された。人気があったらしく、その後も寛延、天明と版を重ねるロングセラーとなり、挿図（上田氏の論文に従い、本稿では、このころに制作された刊本の図絵を「挿図」と称することとする）つきのダイジェスト本、翻案物、歌舞伎、人形芝居、浮世絵などの題材となり、受容層が拡大していったという。

ここで、その後に刊行された挿図つきのダイジェスト本の主なもの

を上田氏の論文に沿ってあげると、享保6年（1721）羽川珍重（1685～1754）画『三国志』（赤本）、宝暦10年（1760）鳥居清満画『通俗三国志』（黒本・青本）、刊年未詳（安永元年〈1772〉頃刊か）『通俗三国志』、天明8年（1788）『通俗三国志』（黄表紙）がある。本稿で翻刻を試みようとする『絵本三国志』はこれに続くものであるが、黒本・青本に分類される鳥居清満画『通俗三国志』と大きな違いがある。

鳥居清満画『通俗三国志』は、全丁挿図であり、毎丁挿図の余白に登場人物についての解説や発言を添えた形式になっている。そして、添えられた文をどの部分から読むかは読者に任されているかに見える。近世の文学史を展望するとき、黒本・青本に続くものは黄表紙であるが、ともに、挿図の余白に文字が書き込まれている。これは挿図を主体としているからである。これに対して、例えば浮世草子など読むことを主体としたものは、挿図部分と文章部分がはっきり分かれた体裁となっている。主体である文章の間に従である挿図が添え挟み込まれているということである。

では『絵本三国志』は挿図と文章のどちらが主体だろうか。

先の鳥居清満画『通俗三国志』と違って、挿図と文章の部分が明確に分れている。文章についてみれば、物語として一続きに読むように作られている。このことが『国書総目録』で「読本」に分類される由縁であろう。が、文章の作者については記載がなく、明瞭を欠く。

これに対し挿図の制作に関しては、見返しに「浪華畫工　桂源吾宗信圖」、巻十の奥付に「図画　浪華　桂源吾宗信」と作者名を掲げ、巻十の奥付には更に「鐫工」として石原半兵衛を筆頭に5人の名、「摺与工」として古川藤兵衛をふくめて2人の名を明確に記している。挿図の関係者に敬意が示されていることがわかる。このことからみて、本書は挿図を主体として制作されていることがわかる。

『絵本三国志』は読みものの体裁をとりながら「絵本」を意図して作られていることは確かであり、実際、本文より挿図の丁数のほうが多い巻が大半である。

このことは文学史上でどのような意味をもっているのだろうか。

『読本事典』（国文学資料館・八戸市立図書館編、2008年刊）を繙くと、寛政（1789～1800）後期に、大坂で勝尾屋六兵衛が岡田玉山画『絵本太閤記』（全七編、寛政9年〈1797〉～享和2年〈1808〉刊）という「絵本読物（〈絵本もの〉読本）」を開板したことは「注目すべき」である、としている。これは太閤記ものの歌舞伎の流行に目を付けた板元勝尾屋がこれを絵本化することを思いついて企画したものらしいが、その後速水暁斎著・画『絵本忠臣蔵』（前編：寛政12年〈1800〉刊、後編：文化5年〈1808〉刊）など続々刊行され、「絵本読物（〈絵本もの〉読本）」が文学史の一角を飾ることになる。そして『読本事典』は『絵本三国志』を、その前史にあるものと位置づけている。これは、横山邦治氏『読本の研究―江戸と上方と―』（1974年、風間書房刊）「展開期の読本」の中で『絵本三国志』が「絵本もの前史」の条でとりあげられているからであろう。

横山氏は「「絵本忠臣蔵」を絵本ものの初出とするのは、やや早合点であって、すでにはやく「画本三国志」一〇（都賀大陸 桂源五画）天明八年刊　を見ることができる」（ここにいう「画本三国志」は本稿で取り上げる『絵本三国志』と同一で、本稿では序題・内題により『絵本三国志』とする）と述べる。そして、都賀庭鐘が息大陸の序のあとに鼎の賛を与えていることや当時の庭鐘の仕事ぶりからみて、庭鐘がこの『絵本三国志』の刊行にかかわり、また、期待したであろう、と推測する。そしてさらに、十巻末尾の広告に「全部二十冊」とし、「従十一至廿嗣出」の予告があるにもかかわらず、「嗣出分が出板された気配がない」ことから「恐らく、庭鐘の期待に反して不評」で、「続刊できなかったのであろう」と推測

する。その理由のひとつに「全くの粗筋のみといってもいいものであった」ことをあげておられる。しかし、絵本の主な受容層が婦女子であるとしたら、この『絵本三国志』が決して婦女子になじまないつくりであったことも原因しているかもしれない。

まず、先述のように、鳥居清満画『通俗三国志』は挿図の余白に文字が書かれているが、仮名文字が多い。これに対して『絵本三国志』は挿図が多いとはいえ、まず文字だけのページから始り、それも例えば巻一の本文第1丁表についてみれば、仮名が90字足らずなのに対して漢字が140字ほどもある。書き出しも、前者は湖南文山著『通俗三国志』による文が用いられているとはいえ、人物紹介に必要な最小限にとどまるのに対し、後者は黄巾の乱など、物語の歴史的背景から説き起こしている。前者は挿図の中に登場人物の短いセリフを口語体で添える体裁となっているが、後者は漢文を読み下したような堅苦しい文の連続である。挿図については、前者は人物に焦点をあてアップに描いているのに対し、後者は背景も遠近法を用い、「背景の樹木岩石山容などに、伝統画派の狩野風に近い筆致が用いられ」（鈴木重三「日本における三国志の挿絵本」《『絵本と浮世絵』1979年、東京美術出版社刊》）ており、格調高い本格的なものとなっている。こうしてみると、用語・挿図、さらには文と絵を分けた本のつくりのどれひとつとっても絵本の主な受容層である婦女子に好まれるとは思われない。『絵本三国志』が「庭鐘の期待に反して不評」だったとしたら、このことが大きかったかも知れない（但し、本翻刻の底本には繰り返し読まれた形跡がある）。

しかし、横山氏は『絵本三国志』を以後に続く絵本ものの「初出ともいうべき」と位置付け、「半紙本型読本のなかに〝画本〟（見返しに見える字）〝絵本〟（題簽、内題などに見える字）を冠した題名を導入したという功は認め得るであろう。しかして、発生期読本に見られた仇討ち話を中心とした実録物の系譜からは題材を選ばず、中国種とはいえ史伝もの軍記に着目していることは、一つの見識を示しているとしていいであろう」という評価を与えておられる。

以上のことから、『絵本三国志』が文学史的には一時代を画するものとしてもう少し評価されてもいいのではないかと考え、ここにその序を翻刻するものである。

【2】書誌について

《底本》金沢大学人文学類上田望氏家蔵のものを用いた。

《題名》本書の題簽は巻一に左肩子持ち枠であると確認できる程度に残るが、巻四は剥落、その他はその痕跡が残るのみで、その部分に題「三国志」と巻数を墨書きしてある。見返し題は「画本三國志」、序題・内題などは「繪本三國志」となっている。本稿では序題・内題に従い、『絵本三国志』とする。

《刊行年・刊行者》第十巻末の奥付によると、刊行年は天明8年（1788）戊辰5月、刊行者は攝府（大阪）書林　葛城長兵衛をはじめ3都6肆と見られる。

《蔵版》見返しに「京都書林額田一正人蔵」とある。

《体裁》半紙本袋綴（縦22・5～22・7×横15・8～15・9）、縹色表紙。版面は一重匡郭。版心は、柱の上から5分の1ほどのところに二重山形の上魚尾、そのすぐ下に「繪本三國志」の題と巻数、下から4分の1程度のところに三角形の下魚尾、そのすぐ下に丁数が記されている。

全10巻、10冊である。各巻の丁数は以下の通りである。（（　）内は挿図の数を示す。大方は見開き2ページであるが、半丁1ページのものもある。）

巻一　21丁（12葉）／巻二　25丁（15葉）／巻三　24丁（16葉）

／巻四　25丁（15葉）／巻五　22丁（15葉）／巻六　31丁（15葉）
／巻七　30丁（15葉）／巻八　27丁（15葉）／巻九　29丁（15葉）
／巻十　30丁（15葉）（巻一は外に序等6丁が付されている）

《作者》標題に「画本」「繪本」とあるように絵が主体の書物であり、見返しに「浪華畫工　桂源吾宗信圖」、巻十の奥付に「図画　浪華　桂源吾宗信」とある。本文の筆者については記載がないが、序文により都賀大陸と判断される。

【3】作者について

〔a〕挿図の作者：桂源吾宗信

『国書人名辞典』（1993～1999年、岩波書店刊）に次のように記されている。

桂宗信（かつらむねのぶ）　絵師　〔生没〕享保20年（1735）生、寛政2年（1785）8月27日没。56歳。墓、大阪天王寺清寿院。〔名号〕名、常政・宗信。通称、源吾・源五郎・左司馬。号、雪典・眉山・通神道人・通神亭。〔経歴〕大阪今橋中橋筋北横町・舟町に住す。画法を月岡雪鼎に学び、人物・花鳥を能くした。肉筆美人画の他、読本・狂歌本の挿絵を描いた。〔著作〕『絵本三国志画』〈天明8年刊〉、『女撰要和国織画』〈明和6年刊〉、『狂歌五題集画』〈天明元年〉、『狂歌両節東街道画』〈安永9年刊〉、他

〔b〕文章の作者：都賀大陸

本書の文章の作者については見返し・奥付等に記載がない。中村幸彦氏は「都賀庭鐘伝攷」（『国語と国文学』1961年）の天明8年の条で、「大陸の序によれば、『演義三国志』の行なわれるについて、「京師書林。以レ有二前書行一。尚重欲下刻二図象一。而假中鼓吹上」、そして画者を求めた時、「余于レ時令三桂眉仙。従二事於其経営一。自来閲レ年幾二十」にして、眉仙の画ができたので、「於レ此乎。啓レ筆馳レ墨。既得レ卒レ業」とあれば、大陸の著とみなすべきである」と記す。以後『絵本三国志』の作者は都賀大陸である、ということは定説になっている。

筆者は「啓レ筆馳レ墨。既得レ卒レ業」は「一日刻二齋扉一来曰」で始まる眉仙の言葉の結び部分ではないかと考える。なので「啓レ筆馳レ墨。既得レ卒レ業」人物は眉仙ではないかと考えるが、以下「旁効二画引一。濫加二国字一。……」は序者の気持を述べたもので、これから考えて序者都賀大陸が『絵本三国志』の文章を作ったのは確かである。そこで、作者都賀大陸について、やはり『国書人名辞典』の解説を載せておくことにする。

都賀大陸（つがたいりく）　医者　〔生没〕生没年未詳。江戸時代中期の人。〔名号〕名、枝春。字、直丞。通称、直之丞。号、大陸。〔家系〕都賀庭鐘の男。〔経歴〕大阪天満に住して医を業とし、傍ら読本等の著作をした。父庭鐘が安永9年（1780）『康熙字典琢屑』を刊行した際、使用のための凡例「初学索引」を付している。〔著作〕『絵本三国志』〈天明8年刊〉、『投壺今格編』〈明和6年刊〉、他

〔二〕「絵本三国志序」翻刻

〔凡例〕

1、注を付す関係から、本文の翻刻をいくつかに分けて示した。
2、そのあとに〈訓読〉、〈注〉を付した。
3、〈注〉の〔漢〕は諸橋轍次著『大漢和辞典』、〔康〕は『康熙字典』、〔日〕は小学館編『日本国語大辞典』からの引用

であることを示す。『大漢和辞典』の解説は現代仮名遣いに改めた。

4、「繪」を「絵」、「國」を「国」など、一部通行の文字に改めた。

5、用例については、近世のもの、また、都賀庭鐘が安永9年（1780）に翻刻校刊したことから『康熙字典』の中からあげることを心掛けた。

絵本三国志序

【本文1】 演-義三-国以二国字一行、二于世一也。久矣。其於レ爲ルニ話也。膾二炙人-腸一。糖二餳児-口一。方且升-平無-疆。百-事得レ時。波-末及二歌舞一。市-農耽二間談一。此喜二耳食一。不レ厭ハ二彼食-言一。話-説之托二国-字一者。続々而起。偽閒目以二軍書一也。如レ可レ笑矣。

〈訓読〉 演義三国国字を以て世に行るゝや、久し。其話為るに於るや、人腸に膾炙し、児口に糖餳す。方に且升平無疆、百事時を得て、波末歌舞に及ぶ。市農間談に耽り、此に耳食を喜ぶ。彼食言を厭ず、話説の国字に托する者、続々として起る。偽閒目するに軍書を以てするや、笑う可きが如し。

〈注〉

1、糖餳＝こなもち。ただし、「糖二餳児口一」は下の「膾二炙人腸一」に対する語で、本文8に「是即糖餳止レ啼耳」とあることから、子供だましの意に用いているか。

2、升平＝太平の世。『絵本三国志』が刊行されたころはまさに天下太平の時代といえる。

3、無疆＝限りない。

4、間談＝閑談とも。気ままにのんびり話をすること。

5、耳食＝聞いただけで物の味を判断する意から転じて、自分で充分に吟味して判断するのではなく、ただ他人の説のうわべを聞いて、むやみにこれに従う意。

『孔雀楼筆記』（清田儋叟著、明和5年〈1768〉刊）序「芸苑之士。（略）滔々者以耳食矣。亦何足論。（芸苑ノ士、滔々タル者以テ耳食ス。亦何ゾ論ズルニ足ラン。）」、『山中人饒舌』（田能村竹田）「世悦山水。衆口同声。亦耳食語。（世の山水を悦ぶは衆口同声。亦耳食の語なり。）」

6、食言＝『近世説美少年録』（曲亭馬琴作、文政12年〈1829〉～天保3年〈1832〉）一-五「食言多き人こころ」

7、偽閒＝いつわりやいきちがい。（「閒」＝〔熙〕迭也。）

【本文2】 京-師書-林。以レ有二前-書行一。尚重欲下刻二図-象一。而假中鼓-吹上。遂募下工レ畫者於洛-摂之地上。余于レ時令三桂-眉-仙。従二事於其経営一。自-来閲レ年幾二一-十。杳-乎不レ見二其人一。一日刻二齋扉一来曰。

〈訓読〉 京師の書林、前書の行う有を以て、尚重て図像を刻して、鼓吹を仮らんと欲す。遂に画に工なる者を洛摂の地に募る。余時に桂眉仙をして、其経営に従事せしむ。自来年を閲すること幾んど二十。杳乎として其人を見ず。一日齋扉を刻て、来て曰。

〈注〉

1、閲年＝一年を経る。「自来閲レ年幾二十」とあるのを信じると、『絵本三国志』中の148葉の挿図を制作するのに20年かかったことになる。

2、齋扉＝立派な扉。「扉」は、書籍の見返しの次にあって、書名・著者名などを記したページ。

【本文3】 此演-義也。元-明以-降。盛附二優劇一。模二體-態一。弄二

意-気ヲ-。美-悪分レ形ヲ。賢-愚異ニスレ容ヲ。則掉二戟ヲ鳳-亭ニ-。起二臥ヲ草-廬ニ-。及長-坂力-戦之勇。華-陽縦スノレ仇ヲ之義。至下劉衒リ二小善ヲ一。曹忌ムニ中鶏-肋ヲ上。優-技振々ト其科尽セリ矣。画之所ス施。恐クハ不レ能ルレ出コト二其右ニ一焉。世常説。詩中有レ畫也。劇-裏豈ニシテ得レ無コトヲレ態哉。

〈訓読〉此の演義や、元明以降、盛んに優劇に附して、體態を模し、意気を弄し、美悪形を分ち、賢愚容を異にす。則ち戟を鳳亭に掉じ、臥を草廬に起す。及び長坂力戦の勇、華陽仇を縦すの義、劉小善を衒り、曹鶏肋を忌むに至る。優技振々と其の科尽せり。画の施す所。恐くは其右に出ること能はざらん。世常に説く、詩中畫有るなりと。劇裏豈態無きことを得んや。

〈注〉

1、優劇＝芝居。『鴛渚志餘雪窗談異』「至十五昏時、城中俄伝東門灯彩之盛、有女楽美観、優劇逞技」

2、掉二戟鳳亭一……曹忌中鶏肋上＝この部分は『三国演義』で「優劇に附」されたエピソードを列挙している。

「掉二戟鳳亭一」は、本書巻二の「司徒王允説二貂蟬一」から始まるエピソード。司徒王允が董卓の悪逆を嘆くのを見て、王允に幼時から養われていた妓の貂蟬が自ら申し出て董卓と呂布を籠絡し両者の仲違いをはかり、これを利用して王允が董卓を亡ぼすというもので、その山場が「鳳儀亭呂布戯二貂蟬一」の段。その末尾に「此一段を後世雑劇に扮して。鳳儀亭掉戟董卓」とある。

「起二臥草廬一」は、本書巻五末の「玄徳三顧二茅廬一」から巻六の「定三分孔明出二茅廬一」にかけて見えるエピソード。玄徳が三顧の礼を尽して孔明を軍師にむかえる、というもの。

「長坂力戦之勇」は、本書巻六の「長坂坡趙雲救二幼主一」に見えるエピソード。玄徳は兵と民を率いて江陵に向かうが曹操の大軍に圧倒されて苦戦し、家族もばらばらになる。そこで趙雲が単騎で玄徳の糜夫人とその子を救うが、深手を負った糜夫人は子を趙雲に託して自らは井戸に身を投げてしまう。趙雲はやむなく敵と戦いながら立ち退くが、その子が王となる予兆があらわれる、というもの。

「華陽縦レ仇之義」は、本書巻七の「曹操敗二走華容道一」「関羽義釈二曹操一」によるエピソード。関羽は曹操の退路に立ちふさがるが、かつて曹操に優遇された恩義を忘れず、見逃すというもの。

「至下劉衒二小善一。曹忌中鶏肋上」は、本書巻八から十までの成り行きを指す。すなわち、劉備は、たとえば、零陵・武陵・長沙・桂陽を攻め、降参した太守・郡守を再びその地位につける、周瑜が孫権の妹孫夫人をめあわせることを口実に玄徳を呼び寄せて殺そうとはかるが、母呉夫人・孫夫人が玄徳を気に入ってしまう、龐統の劉璋攻略策を同族だからという理由でしりぞけるなど、幾多の戦いをその人柄のよさできりぬけ、ついに漢中王となる。それに対して曹操は、夏侯淵の仇討ちを口実に蜀に攻め入るが、孔明・趙雲・張飛・魏延らにはばまれて苦戦し、目前の鶏肋（鶏のあばら骨）を見て「鶏肋鶏肋」とつぶやく。このことから曹操の心底に撤退の思いがあると察した楊脩を憎んで殺し、さらなる進撃をするも魏延の矢にあたり、やっとのことで長安にもどる、というもの。

「此演義也。元明以降。盛附二優劇一。……」とあるが、『三国志演義大事典』（1996年、潮出版社刊）によると、中国では、『三国演義』が完成する以前から『三国志』の人物を題材とした演劇が盛んに行なわれたようである。『三国演義』が完成した後はこれを題材とした劇が盛行したのは勿論のようである。

3、振々＝盛んなさま。盛大なさま。『峡中紀行』（荻生徂徠、宝永3年〈1706〉）「其子孫振々、有二顕而侯者一」

4、科＝しぐさ。

【本文4】問二乎優一人一西一劇無レ所レ傳。況又技一骨素有三才與二不一才。観者亦有下馴レ能知上レ分二其為レ巧為一レ拙。殿一最評一品。其詳如二春一秋予一奪一。馬一班研一究褒一貶不レ究二異一議一。而雅一楽也者。温一重養一體。巧一簡得レ中而不レ流。

〈訓読〉優人に問んか。西劇伝る所無し。況や又技骨素と才と不才有り。観る者亦馴れて能く其の巧為ると拙為るを分つことを知る有り。殿最評品、其の詳なること春秋の予奪の如し。馬班研究し褒貶異議を究めず。而して雅楽なるものは、温重養體、巧簡中を得て流れず。

〈注〉

1、西劇＝「西」は日本から見て西の中国をさし、先に挙げた元明の劇をさすか。『莠句冊』（都賀庭鐘、天明6年〈1786〉刊）九「唐土は黄金乏しく。一聲千銭に当り。赤銅是に次と聞ば。（略）山伏云。西土もとより赤銅乏しからず」、『胆大小心録』（上田秋成）七六「萩の字、万えう集には、秋芽、又牙子花など書きたり。（略）西土にては、今は胡子花とよぶ」に見える「西土」は中国をさす。

2、技骨＝わざの品格か。

3、殿最＝〔日〕（「殿」は下功、「最」は上功の意）すぐれた功績とそれほどでもない功績。『本朝文粋』九・学校如林詩序〈大江朝綱〉「王何之家、争二殿最於毛髪一」、『江談抄』二「後人難レ決二殿最一歟」

4、春秋予奪。馬班研究褒貶＝「春秋」は五経の一で、孔子が手を加えたという史書。「予奪」は、『童子問』「若し夫れ日月名字爵位の間に於て褒貶予奪する者は、聖人の意に非」の用例から考えて「褒貶」の意で用いられていると考えられる。「馬班」は司馬遷と班固。「史記」と「漢書」。

『春秋』に関して「一字褒貶」という語がある。〔日〕は杜預の「春秋左氏一序」の「春秋雖下以二一字一為中褒貶上、然皆須三数句一以成レ言」より出た語とし、一字の使い分けで、人をほめたり、けなしたりすることを意味すると解説する。『経典題説』（林羅山）二九「故に春秋に書せる一字の褒美は、王公の栄華にもまされり、一字のそしりは市町にて打擲せらるゝ恥よりも劣れりと云へり」、『経子史要覧』（荻生徂徠）上「魯の春秋のみ後世に存せり、（略）古来の学者、一字の褒貶と云ふことに拘はり泥みて、いろいろと穿鑿妄解す、必ず信ずべからず」などにみえるように、近世においては『春秋』に関する「一字褒貶」という語は『春秋』を学ぶ者の間ではよく知られていたようで、「春秋予奪」はこれを踏まえた語と考えられ、「春秋予奪。馬班研究褒貶」は、観劇の輩の劇評は細部に至っている、の意と解することができる。

5、雅楽＝正しい音楽。

6、温重＝温和で荘重の意か。

7、養體＝体を養う。

8、巧簡＝精巧と簡単の意か。

9、不流＝ほどよい状態を保つ意か。〔熙〕流漫無二節制一也。

【本文5】其偽一劇也。師レ心而従レ所レ適。但老一優為レ科也。志而不為。々而有レ所レ限。量二其浅深一。汽一乎不レ易レ商焉。喜大而何不レ揚レ笑。憂窮者反恬一然。又不レ怠当一時有二萬一種之意一態一也。優一者果能得二摸出一否。又方二臨レ境奔一レ好。科与レ時不レ無レ不レ移。大一都直一鎮。人情豁一落。采二易一直一。不レ愛二沈滞一。

〈訓読〉其れ偽劇は、心を師として適く所に従う。但老優にして科を為すや、志て為さず、為して限る所有り。其の浅深を量るに、汽乎として商り易からず。喜び大にして何ぞ笑を揚げざるや。憂窮る者は反て恬然たり。又怠らず当時万種の意態有り。優者果して能く摸し出すことを得るや否や。又境に臨み好に奔るに方て、科と時と移ざること無くんばあらず。大都直鎮、人情豁落、易直を采て、沈滞を愛せず。

〈注〉

1、偽劇＝「戯劇」の意か。「戯劇」は芝居、演劇のこと。『譯註先哲叢談』（新井白石）巻五「七歳の比ひ父母拉して戯劇を觀る」とあり、『詩学逢原』上「今日ニ至テ、詩只慰ミゴトニナリ、甚シキハ俳語戯劇ノ詞ヲ用ヒ」では、古典文学大系の補注に『詩轍』の一文が付されているが、その中に「歌舞戯」という語が見え、また「戯劇」を歌舞伎の意に用いている。

ただし、「喜大而何不レ揚レ笑」とあることなどから、前出の「優劇」に対して、正式でない演劇の意に用いた語か。例えば「俄」は享保（1716～1736）のころ始まったものであるが、大坂の住吉神社で参詣者が行なったのが初めてだという。後、遊里の「流し俄」などに発展し、長く続くという。最後に「はね」「下げ」などと称する落ちがあることが『孔雀楼筆記』（前出）、『古今俄選』（安永4年〈1775〉刊）などに見える。

2、汽乎＝水がかれている、中が空っぽ、の意、また、茫漠としている意か。

3、意態＝心のさま。

4、方＝〔熙〕〔説文〕併レ船ヲ也。象二両舟省総レ頭形一。〔漢〕ならべる。あわせる。〔爾雅、釈水〕大夫方舟。〔李注〕併二両船一。

5、方二臨レ境奔一レ好。科与レ時不レ無レ不レ移＝そのときの場面・嗜好に合せて、しぐさは必ず時代と共に変化していく、の意。

6、大都＝おおむね。あらまし。大抵。『書言字考節用集』「大都」

7、直鎮＝すぐに鎮まる意か。

8、人情豁落。采二易直一。不レ愛二沈滞一＝人情はひろくておおらかで、平易率直をむねとし、沈滞して進展しないものを好まない。

【本文6】 於二其表-粧一。亦唯善二魁-梧一。美二大-袖一。不レ屑二々於其選一。通-是要-津。士-俱狡-猾。穿取二詳密一。不レ悦二卒畧一。其趣専在二抑揚縦-送之域一。以取二其顧一。雖レ得二気-象一也。有二一忽-諸一。即未レ免二笨-伯之貶一。其既如レ此。劇亦不レ足レ頼歟。

〈訓読〉 其の表粧に於るも、亦唯魁梧を善とし、大袖を美とし、其の選に屑々たらず。通是の要津、士俱の狡猾、穿て詳密を取り、卒略を悦ばず。其趣専ら抑揚縦送の域に在て、以て其の顧りしを取る。気象を得りと雖も、一の忽諸有れば、即ち未だ笨伯の貶を免れず。其れ既に此くの如し。劇も亦頼むに足らざるか。

〈注〉

1、表粧＝いでたち、の意か。

2、魁梧＝体が大きいさま。たくましい。『先哲叢談續編』八・石筑波「正盛（略）膂力人に絶し、能く強弓を彎く、其人と爲りや、魁梧美髯、甚だ威容あり」

3大袖＝袖口が広く、たもとが長い衣服。朝廷の即位・大嘗会などの大祀の時、小袖の上に着る礼服。ここは礼服のように立派な衣装を指すか。『在京随筆』「襟如法衣。（略）水戸殿ニテ御勘ノ書物ヲ見ハ、礼服ノ大袖ノ如ナル袖ナリ也」

4、不レ屑二々於其選一＝「屑々」はこせつくさま。役者のいでたちについて細かいことにあまりこだわらない、の意か。

5、通是要津＝「通」は物知りの意か。「要津」は要職にある者。

6、士俱＝〔漢〕に「「俱」は「酷」に同じ」とある。

7、卒略＝先を急いだり、省略したりすること。『山中人饒舌』上「所謂漢画。（略）用筆卒略。施彩軽媚（謂はゆる漢画は（略）用筆卒略、施彩軽媚なる〈あり。〉）」

以上の「士俱狡猾。穿取二詳密一。不レ悦二卒畧一」については、演技についての言葉かと思われるが、未解明である。

8、抑揚＝演技の自由闊達なさまをいうか。『莠句冊』二「都会の地は態度優に抑揚竜り」、同八「陳図南は酒落せし高明にて。抑揚〈〈左注〉しめゆるめ〉皆心を用ひたり」

9、縦送＝〔漢〕矢をはなつを縦といい、禽を追うを送という。『漢語大詞典』「奔馳之貌」。演技のすばやいさまをいうか。

10、顧＝〔熙〕〔玉篇〕瞻也。廻レ首曰レ顧。（略）又眷也。

11、気象＝気風、風格。『英草紙』（都賀庭鐘、寛延2年〈1749〉刊）四「其の気象高きが故に、けつく世上のならはしに漏るる事はなさず、女色をも親まず遠ざけず」、『莠句冊』二「美は易くして勢を失ひやすく。醜はなしかたくしてよく気象を養ふ」など。

12、忽諸＝なおざり、また、ゆるがせにするの意。『南総里見八犬伝』（曲亭馬琴、文化11～天保13年〈1814～42〉）六九回「はやく支度を整へて、わが宿所までおくり来されよ。忽諸になし給ひそ」、同八一回「なほ忽諸にしがたきは、刀傷人の療養なり」など。

13、笨伯の貶＝肥大な人に対する貶称。また、雑なことに対する酷評。「雖レ得二気象一也」以下は、それなりの風格は備わっているが、ちょっと雑なところがあると酷評されることもあり、だから劇も挿図制作の参考にならない、の意と考えられる。

【本文7】 難哉其当レ之矣。所二以甲一子為レ之有一レ移也。雖レ然熟々見二。彼所一レ設レ図也。不レ過二貴一人垂拱。小一人下拝。智一傭俊。兇獰一而已。閨一閤鈒一裙。巧一髪凝二宮一粧一。長一袖学二京一様一。所レ不レ可レ已乎。望レ負レ椅。臥上レ床。立以取レ禮。揖而守レ譲。是其平常。有焉。知レ彼施レ此。則足レ爲レ不レ失二其半一矣。於レ此乎。啓レ筆馳レ墨。既得レ卒レ業。

〈訓読〉 難いかな其の之に当ること。甲子之が為に移ること有る所以なり。然りと雖も熟々彼が図を設る所を見るに、貴人は垂拱し、小人は下り拝し、智傭は俊に、兇は獰なるに過ぎざる而已。閨閤鈒裙は、巧髪宮粧を凝し、長袖京様を学ぶ。已むべからざる所か。望すれば椅を負ひ、臥すに床に上り、立て以て禮を取り、揖して譲を守る。是れ其の平常に有ん。彼を知り此を施せば、則ち其の半を失せざると為せるに足る。此に於てや、筆を啓き墨を馳せ、既に業を卒することを得たり。

〈注〉

1、甲子＝年月。

2、彼＝これまでに刊行されたもので、たとえば鳥居清満の『通俗三国志』を指すか。

3、垂拱＝〔漢〕衣を垂れ手をこまぬく敬礼。〔礼、玉藻〕凡侍二於君一、云云、垂拱。〔疏〕拱、沓レ手也、身俯則宜二手沓而下垂一也。

4、傭＝〔熙〕〔説文〕皃頌儀也。

5、閨閤＝奥御殿。

6、裙＝女性の衣装の一。も。裳。

7、凝＝〔熙〕〔説文〕水堅也。本作レ冰。（略）又〔増韻〕成也。定也。

8、揖＝えしゃくする。

9、不失＝誤りがない。

【本文8】 旁効二画一引一。濫加二国一字一。短一毫其不レ亦乎。今乃要レ之。則鴻一鵠与二燕一雀一。自不レ同二風雲一。万一乱百一機。御摂随二授一承一。忠一肝勇一膽。出二丹心一。固非二以レ我所一レ可レ比。是即糖一餳止レ啼耳。

〈訓読〉 旁ら画引に効て、濫りに国字を加へ、短毫其亦せずや。今乃ち之を要するに、則ち鴻鵠は燕雀と、自ら風雲を同せず。万乱百機、御摂授承に随う。忠肝勇膽、丹心に出づ。固より我を以て比すべき所にあらず。是即ち糖餳啼を止るのみ。

〈注〉

1、旁＝〔熙〕〔釈名〕在レ辺曰レ旁。〔玉篇〕猶レ側也。非二一方一也。

2、効＝ならう。かたどる。のっとる。〔熙〕〔集韻〕象也。功也。

3、画引＝画の導き、眉仙の挿図に影響されることか。（「引」＝〔熙〕〔集韻〕導也。〔史記韓長孺伝〕奉引堕レ車蹇。〔註〕為二天子導引一而堕レ車跛。）

4、短毫＝未熟な筆の意で、序者大陸が謙遜して用いた語か。

5、要＝つまり。結局。これまでのことをかいつまんで言えば。

6、万乱百機＝多くの乱れと多くの変化のきざし、の意か。

7、御摂＝制禦し、しずめること、統御統摂すること、の意か。

8、授承＝さずけることとうけること、の意か。

9、忠肝＝忠義の心。忠魂。忠膽。

10、勇膽＝勇ましく度胸がある。強い度胸。

11、是＝「彼」に対し、自分つまり大陸自身をさすか。

〈補注〉本文1で「不レ厭二彼食言一。話説之托二国字一者。続々而起。偽閒目以二軍書一也。如レ可レ笑矣」と、既に刊行された『三国演義』関係の書物を批判していながら、「旁効二画引一。濫加二国字一。短毫其不レ亦乎」と心配し、自分もまた「糖餳止レ啼耳」であると、謙遜している。

【本文9】又見二宣一和写二爽鳩一。幾平一章其醜一。不レ惜二精一密一。而視レ探幽氏之快墨（一）。鳶烏亦無レ辨者。蹯一膺之辷一羊一羹一。其燕一好自別。而賞一采家各有レ所レ取。抑々在二拂レ絹臨レ素之際一。豈遑レ迎二其衆一好一哉。方今膾一炙已可レ口。鼓一吹早響應。有下不レ期レ得而得上也。眉一仙為レ業。於レ是乎可レ稱二一一家一矣。

戊申正月大陸都賀直撰

〈訓読〉又宣和の爽鳩を写すを見るに、幾んど其の醜を平章し、精密を惜まず。而るに探幽氏の快墨を視れは、鳶か烏か亦辨無きものに、蹯膺の羊羹に辷る。其燕好自別なり。而るに賞采の家各取る所有り。抑々絹を拂い素に臨むの際に在りて豈其の衆好を迎るに遑あらんや。方に今膾炙已に口に可に、鼓吹早く響き應ず。得ることを期せずして得ること有るや、眉仙の業為り。是に於て一家と稱すべし。

戊申正月大陸都賀直撰

〈注〉

1、宣和＝『宣和画譜』のこと。〔漢〕二十巻。撰者未詳。宋の徽宗の朝に内府に蔵していた画、６３９６軸、２３１人を収める。大抵米芾の鑒別したもので、懐古図より善いという。〔四庫提要、子、芸術類〕

2、爽鳩＝〔漢〕鷹の異名。

3、平章＝わかち明らかにする。

4、探幽氏＝狩野探幽。慶長7～延宝2年（１６０７～７４）。江戸初期の画家。京都の人。孝信の子。名は守信。宗家を弟尚信に譲り幕府の御用絵師となり、鍛冶橋狩野家を起こす。二条城、名古屋城をはじめ、多くの寺社、大名屋敷の障壁画や掛幅を描き、武家に適合した画体を確立し、狩野派繁栄の基礎を築いたという。作品「東照宮縁起絵巻」「紫宸殿賢制聖障子絵」など。

5、蹯膺＝「蹯」は狐・狸など獣の掌、「膺」は肉のあつもの。高級品。「蹯膺」も「羊羹」もあつもので、高級料理。「蹯膺」は『宣和画譜』の爽鳩、「羊羹」は探幽の鳥の絵を暗示するか。

6、燕好＝酒盛りをし引出物を贈って、あつくもてなすこと。また、閨房の諧楽。『詩経』「宴爾新昏、琴瑟静好」に拠るという。ここは探幽の表現が派手であることをいうか。

7、賞采の家＝評価が確定している画家たちを指すか。もしそうなら、『宣和画譜』も探幽もそれぞれ取るところがある、の意になる。

8、戊申＝明和8年（1788）にあたる。

〔三〕「絵本三国志・鼎賛」翻刻

【本文1】

鼎重為體　　鼎重く體を為し
九牧朝宗　　九牧朝宗す
三足自用　　三足自ら用うれど
両耳奈聰　　両耳奈ぞ聰からん

大江都庭鐘

〈注〉大江都庭鐘＝（『国書人名辞典』より抜粋）都賀庭鐘　医者・漢学者・読本作者。〔生没〕享保3年（1718）生、没年未詳。80歳前後で没か。〔名号〕名、庭鐘。字、公声。通称、六蔵。号、十千閣・近路行者・大江漁人・辛夷館など多数。〔家系〕子、大陸。〔経歴〕大阪の人。享保末年（～1736）京都に遊学し、書・篆刻を新興蒙所に、医を香川修庵に学ぶ。また漢学を学び、白話文学流行の折から、唐話を研究し、翻案も試みた。30歳までには大阪天満で医を開業したと目される。書画をよくし、物産学も修め、安永9年（1780）『康熙字典』の校刊を行ない、読本作者としても知られた。〔著作〕『英草紙』〈寛延2年刊〉、『繁野話』〈明和3年刊〉、『莠句冊』〈天明6年刊〉、他

【本文2】霊帝紀の論に云。鼎の器たるや。小なれども重くして其家の神是を宝とす。他人奪て別処に移すまじきを。負て趨るにいたりては。歎ずへしとなり。

〈注〉「霊帝紀の論」は正しくは『後漢書』「献帝紀」の論のことか。『後漢書』本紀巻九・孝獻帝劉協紀第九に、「論曰、伝称、鼎之為レ器、雖レ小而重、故神之所レ宝、不レ可二奪移一。至レ令二負而趨一者、此亦窮運之歸乎」とある。後漢王朝最後の皇帝である孝獻帝に対する人物評であるが、本文はこれをほぼ訓読したものとなっている。

【本文3】楚人が鼎を問ひたるは。周の国勢衰へて。かすかに有か無かと軽しめたるをいふ。

〈注〉『春秋左氏伝』「宣公」三年に「楚子伐二陸渾之戎一、遂至二於雒一。觀二兵于周疆一、定王使三王孫滿勞二楚子一、楚子問二鼎之大小輕重一焉、對曰。在レ德不レ在レ鼎、（略）周德雖レ衰、天命未レ改。鼎之輕重。未可問也」とある。楚子（荘王）が陸渾〈地名〉の異民族を伐ち、遂に洛水のほとりに至り、周の国境で兵威を示した。驚いた周の定王は王孫滿を荘王へのねぎらいの使者としておくったところ、楚子は周の神器である鼎の大きさや重さを尋ねた。王孫滿は答えて、「鼎の大小軽重は、それを持つ人の徳のいかんによるもので、鼎があるからではない。（（略）夏、殷がその徳行の有無により興亡したことを語り）今、周の天子の徳が衰えているとは申せ、天命はまだあらたまっておりませんから、鼎の軽重を問うて、天子の位を奪うなどという野心をおこしてはなりません」と言ったという（明治書院刊「新釈漢文大系」を参考にした。以下同様）。

このことは、「鼎の軽重を問う」という故事成語の語源となり、その後の『史記』『蒙求』『千百年眼』など諸書に取り上げられている。

【本文4】伊尹が鼎を負たるは。己が任として国政を身の上に背負なり。

〈注〉『史記』「殷紀」に「伊尹名二阿衡一、阿衡欲レ奸レ湯而無レ由、乃為二有莘氏媵臣一、負二鼎俎一、以二滋味一説レ湯、致二于王道一」を掲げる。『蒙求』の標題。

【本文5】 其はじめ夏禹王九鼎を鋳て是に記すは。政法を重くし変移せざる標なり。

〈注1〉『説文』に「鼎、昔禹収二九牧之金一、鋳二鼎於荊山之下一、入二山林川沢一者、魑魅魍魎、莫二能逢一之、□協承天休、易卦、巽木於下者為鼎」、『春秋左氏伝』「宣公」三年に「昔、夏之方有レ徳也、遠方図レ物、貢二金九牧一、鑄レ鼎象レ物、百物而為二之備一、使三民知二神姦一。故民入二川沢山林一、不レ逢二不若一、螭魅罔両、莫二能逢一レ之。用能協二于上下一、以承二天休一。桀有二昏徳一、鼎遷二于商一。載祀六百。商紂暴虐、鼎遷二于周一。徳之休明、雖レ小重也。其姦回昏乱、雖レ大輕也。天祚二明徳一、有レ所二底止一。成王定二鼎于郟鄏一、卜レ世卅、卜レ年七百。天所レ命也」とある。この一文は先の本文2で掲げた『春秋左氏伝』の「(略)」の部分に当る、王孫滿の言葉の一部である。昔、夏王が天子としての立派な徳を持っていた時代に、遠方の国々から、それぞれの地方の山川や奇異な物の形を描いて献上させ、また金を九州の旗頭に命じて献上させ、鼎を鋳造した。それに地方から献上した山川や奇異な物の形をきざみ、民に知らせて魔物を見分けるようにさせた。だから民は川沢や山林にはいっても、魔物を避けて通り、魑魅魍魎の害を受けるということはなく、上下が相和合して天の助けを受けて世は栄えたのである。しかるに桀王に至り、その悪徳のために鼎は商（殷）に遷り、商が六百年続いた。しかし商の紂王が暴虐であったため、鼎は周に遷った。鼎を持つ天子の徳が美わしく明らかであれば、鼎は小さくても重くて遷りがたく、その徳がよこしまで乱れておれば、大きくても軽くて遷りやすい。天が明徳を天子に与えるにしても、一定の限度があり、周の成王が都を郟鄏に定めて、そこに鼎を安置したときに周が何代何年続くかをうらなったところ、三十代七百年ということだった。これは天の命ずるところでもある、というもの。

〈注2〉『莠句冊』第五篇「絶間池の演義強頸の勇衣子の智ありし話」で「九鼎」にふれて、登場人物に「漢土のむかし夏の禹王洪水を治めて後水陸の妖怪を閲し。其形状を挙て。（略）外には九鼎に鋳つ鏤つして。門前に列べ。人民に彼象を先に知らしめて。鬼神の姦に勝の術。山林に入て迷はず。魑魅罔両我本形を人に知られては害をなすことあたはず」と語らせている。

【本文6】 国の鼎は長久に動かず。民の鼎は。中の入実を覆す事なかれとまうす

〈付記〉翻刻にあたっては読みづらい文字が多く、間違いが多々あることと思われますが、ご指摘ご教示いただければ嬉しく思います。